

初代の「計算機」今も鮮明

いろはつぶり

1959年1月13日、米・ニューヨーク発の貨物船が横浜港に接岸。20トンを超える大型コンテナ車がクレーン船で陸揚げされた。向かう先は気象庁。コンテナ車の横っ腹の横断幕には「みなさんの天気予報をより正確にする…」東洋で最初の超大型電子計算機」の文字が躍っていた。

気象庁が待ち望んでいた数値予報のための計算機(IBM704型)の到着である。超大型電子計算機と呼ばれたが、半導体を用いた現代のコンピュータとは異なり、演算の心臓部は2千個もの真空管。演算スピードや記憶容量は今の最も安い重さ1キロほどのパン

古川 武彦 元気象庁予報課長

執筆者紹介



1940年生まれ。滋賀県出身、鹿嶋市在住、理学博士。61年に気象庁研修所高等部(現・気象大学校)卒業。予報課長、札幌管区気象台長など歴任。退官後の2003年に気象研究や啓発に取り組む活動の舞台「気象コンパス」を立ち上げた。

コンの足元にも及ばなかった。3月12日、報道陣も招かれた盛大な火入れ式で数値予報が正式にスタート。筆者は翌4月に気象庁の門をくぐったが、将来の天気を物理の法則に基づき、自動的・数値的に導き出すコンピュータ群を目標にした感動は、今も鮮明だ。

その年の9月26日。「伊勢湾台風」が来襲し5千人を超える人命が奪われたが、台風の進路予想はいまだ難しかった。何しろコンピュータの能力が低く、気象衛星などの観測手段もなかったためだ。もう半世紀以上も前のこと。

現在、気象庁が行っている天気予報はスパコンを用いている。ちなみに週間予報や台風進路予報などでは、地球全体を地表から上空まで細かなブロックに区切って、各ブロックごとに約10分刻みで気温や風の値を計算で予測。その数値をもとに、1日後、2日後、1週間後の予測が自動的に出される仕組みになっている。計算時間は約1時間程度だ。

1カ月予報(7月6日)によれば、関東甲信地方の平均気温は平年に比べて低くなる確率が10%、平年並みになる確率が30%、高くなる確率が60%だから、高校野球は炎天下の戦いとなりそうだ。